

過疎・高齢山村の変容過程 ～三重県南牟婁郡紀和町丸山地区を事例に～

松阪大学政治経済学部
寺口 瑞生

紀和町というのは、南北に長い三重県の南端に位置し、和歌山県と境を接する山間の町である。町の言葉を借りれば、「鉱山の町」から「観光の町」へと変貌を遂げつつある地域である。同時にこの町は、人口が最盛期の5分の1（10000人から2000人）、高齢化率が40%を越えるという過疎化・高齢化の進展が著しい町でもある。

この地域には奈良時代から金・銀・銅などが採掘されたといわれているが、紀和町では1934年に石原産業が紀州鉱山として創業を開始して以来、産銅量は国内でも屈指のものであった。だが銅価の低迷、鉱山不況の中で1978年に閉山された。翌1979年に湯ノ口地区に温泉が湧出し、それ以来、都市との交流を中心としたまちづくりが進められている。

紀和町における観光の目玉に「丸山千枚田」がある。これは丸山地区にある棚田地帯であるが、町史によれば、慶長6年（1601）にはすでに7町歩、枚数にして2,200余枚の水田があったとされている。峠から見るその景観の素晴らしさは、筆舌に尽くしがたい。だが、その千枚田もつい数年前までは、実際に作付けされる田が400枚くらいにまで減少し、耕作を放棄された水田は荒れるに任せ、過疎・高齢化の進展の象徴的存在であった。

1993年、丸山地区に「丸山千枚田保存会」が結成された。地元31戸が加入したこの組織は、先祖伝来の田をこれ以上荒らしたくないということで、荒廃地の雑木伐採や草刈りを手始めに、水田を復元する作業を始めた。

1994年、町当局は「紀和町丸山千枚田条例」を制定した。その前文には次のように記されている。

「わたくしたちが誇りにしている地域資源に丸山千枚田（以下「千枚田」という。）がある。千枚田は、祖先から受け継いだ貴重な稲作文化で全国的に稀であり、存在が注目されている。しかし、千枚田における農作業は、地形上、機械による省力化に限界があり、加えて農業環境の変化もあり、休耕地と荒廃地がみられる。

このような状況の中、この貴重な資源を保護し後世に継承していくことは極めて重要で、あわせて有効に活用していくことが、わたくしたちに課せられた責務である・・・
(略)」

町と地元が協力して取り組む千枚田の保存・復元作業は、三重県が「グリーンツーリズム」事業に組み込んだことによって、都市住民との交流の場としてその存在が知られるようになって来た。

本報告は、過疎・高齢山村の実態と、後継者不在の地域における地域保全・環境保全の一例としてこの丸山地区の事例を考察してみたい。